国際交流基金助成事業報告書

薬学部　４年次生　田口真希

１．はじめに

2017 年８月２日から 10 日までの期間、国際交流基金助成事業の助成を受けて、台湾の台北市にて 63th　IPSF（国際薬学生連盟）World Congress に参加しましたので報告致します。

２．IPSF World Congress について

IPSF World Congress は毎年夏に、毎回異なる国で開催されるイベントです。世界各国から薬学生が集まり、各国の薬学生団体の代表が、GA(Genera] Assembly)と呼ばれる総会の場で来年度運営方針の協議・規約の改定・役員選出・各国の活動報告を行う傍ら、10 日間にわたり様々なワークショップやシンポジウムが行われました。参加国数は６０カ国以上、約 600 名が参加しました。

本来は７月 31 日から参加する予定でしたが、CBT 模試受験のため、私は８月２日から参加しました。期間中は、ワークショップやシンポジウムへの参加・キャンペーン活動・企業見学・漢方薬実習そして文化体験なども行いました。ワークショップは興味のある分野を選択し受講できるようになっており、私は　”Study Designs in Pharmacoepidemiology” “Advancing Pharmacy Practice and Education Through International Collaboration” “Applications of Pharmacogenomics on Infectious Diseases Management” “Traditional Chinese Medicine” “Gen Yen Ointment/ Purple Cream” “Pharmacoeconomic” “How global training for pharmacist can make change in patient’s healthcare” “ Professionalism starts with YOU＋ME”などを受講しました。講師は、元 FIP の方や Taipei Medical University の教授でした。既に学んだことのある内容も多く、予備知識があったため大体は理解することが出来、思っていたよりも参加しやすく感じました。ディスカッションをしたり問題を解いてみたりと、大学の講義よりも参加型のものが多かったです。海外の学生の質問が飛び交い、ディスカッションの時間には活発な議論が繰り広げられました。海外の学生はわからないことやコメントがあれば、その都度発言しておりとても積極的でした。また、講義を聴いて、大学で学んでいることは世界共通のシステム・知識なのだと実感しました。

図 1. Workshop ”Traditional Chinese Medicine” の様子

図２．シンポジウムの様子

キャンペーン活動では、グループに分かれて事前準備を行った後、Taipei101 下の広場にて市民の皆さんに向けた、ヘルスケア・薬物乱用防止・たばこ防止・慢性疾患の予防・抗がん・感染症予防などの様々なブースを設けました。私は”Smoking Cessation, Anti Drug Abuse Campaign”のグループに所属しました。グループメンバーは全員国籍が異なっていました。事前準備の際「原因は何か、予防法、身体に起こる被害」などを話し合い、英語がわからない台湾人にも伝わりやすいように、イラスト入りのポスターを作成しました。キャンペーン活動当日は、英語と中国語で台湾人に説明しました。私は中国語を話せないため、英語で説明した後、グループ内の中国語の話せる参加者が中国語に翻訳して説明してくれました。また、簡単な箇所は私も中国語で説明することができるように練習しました。朝から夕方までのイベントで、外はとても暑くて大変でしたが、キャンペーン自体はおもしろかったです。近くでは他の企業や病院・薬局なども健康増進キャンペーンを行っており、自身の健康状態を測定することもでき、健康について改めて考えるきっかけとなりました。

図３．キャンペーン活動の様子

図４．キャンペーン中、市民に話しかける筆者

図５．同じグループの学生との集合写真

漢方薬実習では、大学の実習でも実施した、紫雲膏づくりをしました。大学で行ったときは温度計を見ながら丁寧に作った記憶がありましたが、今回は温度計を用いず、思ったよりもずいぶん簡単に作ることができました。日本と異なるのは、紫雲膏を冷めていない液体のまま容器へ入れてその中で固めるというところです。実習班は自由だったので仲良くなったドバイの友達と行いました。その友達によると、漢方薬の授業はドバイでも受けたそうですが、実習は行ったことがなかったので嬉しいようでした。生薬の知識は少し忘れてしまっていましたが、思い出せる範囲で紫雲膏について説明する事が出来ました。

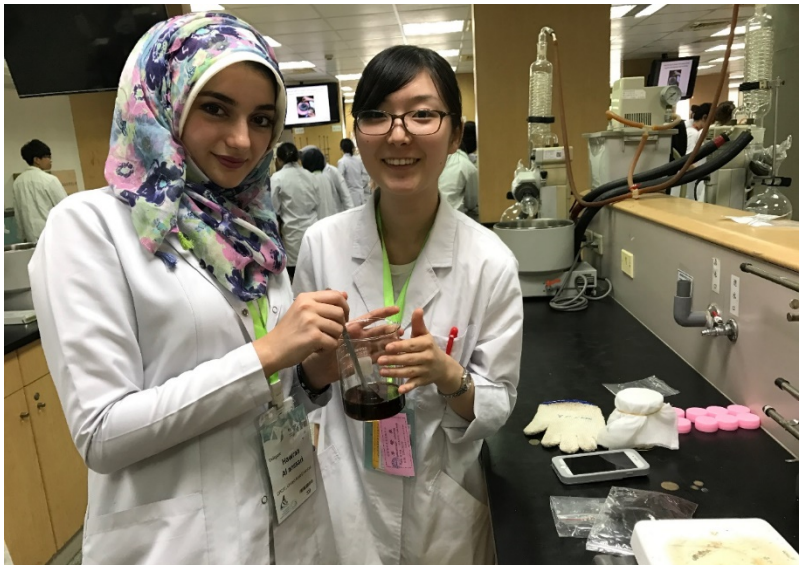

図６．漢方薬実習の様子

最終日は、台湾東洋薬品工業 TTY へ見学に行きました。TTY は感染、腫瘍に特化した薬を生産している製薬企業です。見学時は品質試験中で打錠などは見られませんでしたが、たくさんの機械や設備を見ることが出来ました。１年次の早期体験学習で工場見学したきりでしたので、この機会に台湾でも見学することができ、良かったです。台湾のものも日本の者も大差はありませんでした。

10 日間のうち、このように様々な講義やワークショップを受講しましたが、毎日が勉強漬けというわけではなく、毎晩様々なテーマのパーティが催され様々な国籍の方々と交流を深めることもできました。中でも”International night”は、参加者それぞれが自国の民族衣装を身にまとい、ダンスを披露したりお酒やお菓子を食べたりするパーティで、台湾にいながら世界各国を旅しているようでした。その時の事は一生忘れることはないと思います。パーティで仲良くなった友達とは、休憩中などに日本の薬学制度のこと・インターンシップのこと・イスラム教のことや将来のこと・LGBT や友達関係の話等、たくさんの事を語り合いました。日本と台湾の薬学部は６年制と４年制ですが、東南アジアの国々では４年制が多く、ほかの国ではほぼ５年制ということでした。そして、日本では５年次に

２．５ヶ月ずつの薬局・病院実務実習がありますが、他国では１年間を通して病院・薬局・企業でのインターンシップに参加するか研究をするか選択でき、日本よりも実習期間が長い国が多かったです。日本は６年制に変わったわりに実習期間が短いな、と不思議に思いました。

３．おわりに

私はこの World Congress を１年次生の時に知りました。その頃から海外の学生と交流したいと考えており、単科大学で４年間過ごしながら外の世界も知りたいと強く感じていました。“もし参加できたらこんな話をしよう、こんな事を学びたい“と想像をふくらませていました。しかしいざ参加してみると、自分から話しかけて話題を出さなければ知りたいと思っていた話題にはなりませんので、最初のうちは話を切り出すタイミングを見計らう事に苦戦し、話しかけるのを躊躇してしまいました。それでも参加したからには話さなければと思い、休憩中や朝食の時間はあえてまだ話したことのない人に話しかけ、少しずつ輪を広げる事ができました。交流するうちに外から日本を見ることができ、日本で自国の医療制度だけを学ぶのではなく、世界のスタンダードや様々な取り組みを知り吸収することで、自国の問題点や特徴が見えてくると感じました。そして、他国の薬剤師のレベルや薬局で実践している内容を知り、海外の薬学生と意見を交わすことで、将来の患者さんへ提供できる医療の幅が増えるのではないかと感じました。各国の伝統や宗教・文化や特色があるので、国それぞれが他国のいい部分を模倣することはできませんが、海外の薬学部を知り、お互いに刺激し合うことで、世界の薬学部生そして薬剤師のレベルが上がるのではないかと感じました。

薬学についてだけでなく、台湾の歴史や他国の事を知る良い機会ともなりました。日本は衛生的かつ秩序的で過ごしやすく、欲しい物は何でも手に入り勉強できる環境が整っています。特に薬学部は 70 校以上もあります。私は生まれたときから不自由なく生活してきたせいで、このありがたさとこの国の豊かさに気がつくことがありませんでしたが、海外に滞在して様々な国籍の人と交流すると色々なことに気づかされ、価値観や意識が変わりました。

最後に、World　Congress 参加にあたり、国際交流基金助成事業に採択して頂きありがとうございました。 ここで学んだ事を無駄にすることなく、これからの将来に活かしていけるように精進して参りたいと思います。そして、見聞きしてきたことを少しでも多くの薬学生に発信することで、これからの時代に必要な国際化に貢献できたらいいなと思います。